

ガラテヤ書2章 「一時も譲歩しない福音」

1A エルサレムで守られた福音 1-10

1B 受け入れられた異邦人信者 1-5

2B 交わりの右手 6-10

2A アンティオキアで歪められた福音 11-21

1B 偽りの行動 11-14

2B 律法に対する死 15-21

本文

ガラテヤ書 2 章を開いてください。私たちは前回、ガラテヤ書 1 章にて、パウロが、自分の宣べ伝えている福音が、神からのもの、主イエス・キリストご自身からの啓示だということをお話しました。人によるものではないし、人を通して来たものではないということです。だから、私たちは、聖書から、聖霊によって、自分たちの聞いている福音、信じている福音が、神からのものなのだと確信できるのです。そして私たちも、人の教えを受けているのではなく、神の御霊によって、主イエスご自身を知り、今に至っています。そこから引き離そうとする偽教師たちがいるので、私たちは守らなければいけない、ということです。

2章においては、これら偽教師、ユダヤ主義者らがいるところで、一時も譲歩しなかったパウロの証しを読むことができます。彼らが出てきたとされるエルサレムにパウロたちが行きます。それでも、この福音はそのまま保持されたことを話します。それから、逆にアンティオキアの教会においては、危ういところで福音の真理が曲げられそうになったことをパウロは語っています。興味深いですね、エルサレムにいる使徒たちが、ユダヤ人たちが大半のところでは、異邦人の信者を受け入れることができたのに、異邦人たちが大半のところでは、ユダヤ主義者たちを恐れて、かえって異邦人の信者たちから離れてしまいました。まさに、「言うに易し、行うに難し」であります。

私たちは、いかに教会が主イエス・キリストの福音にとって成り立っているかを知る必要がありますね。それを純粋に保っているから、そこから御霊の働きがあり、教会が健全になります。外からの問題は、教会を清めることが多いです。なぜなら、その福音の真理から、いのちが出てくるからです。けれども、教会がダメになってしまうのは、内からの問題です。福音を福音とせず、他に何か付け足そうとすること。「こうすればうまく行く」ということ。ちょっとした妥協が、全体に影響を与えます。イエス様が、「パリサイ派とサドカイ派のパン種に気をつけなさい。」と言われましたが、少しのパン種である教えが、全体を腐敗させてしまうのです。ですから、ガラテヤ人への手紙は、私たちが、一時も手放さず、福音を純粋に保っていることを教えてくれるので、貴重です。

1A エルサレムで守られた福音 1-10

1B 受け入れられた異邦人信者 1-5

¹それから十四年たって、私はバルナバと一緒に、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。

1章の最後に、パウロはエルサレムに短期間、滞在したことを話しました。そして、自分の故郷であるキルキア地方のタルソに戻ってきます。使徒の働きによると、エルサレムでは、ペテロが、カイサリアでのコルネリウスの一家の回心の話が伝わっていました。異邦人にも、信じるだけで心が清められ、神が受けられるという啓示がありました。そうした中で、ステパノの殉教で各地に散って行ったユダヤ人たちで、ギリシア語のできるものたちがギリシア人にも福音を語ってみるようになりました。そしてアンティオキアで、多くの人がイエス様を信じていったのです。その恵みを聞いたエルサレムの教会は、バルナバを遣わしました。バルナバは、その救いを喜び、主に留まっているように彼らに勧めました。

そうして、バルナバがタルソのパウロを探しに行ったのです。パウロはアンティオキアに来て、ここで教えはじめました。そして、パウロとバルナバは、アンティオキアの教会から聖霊によって遣わされ、キプロス、ピシディアのアンティオキア、イコニオン、リステラ、そしてデルベへと周りまわりました。そして、そこをまた戻って、アンティオキアへと戻ってきたのです。

このようにして、教会が建て上げられていきましたが、そこに、ユダヤからアンティオキアに来た者たちがいたのです。「使 15:1-2 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ」と教えていた。² それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。」このようにして、テトスを伴って、エルサレムに上ったのです。テトスを連れて行ったのは、まさに、彼こそが、主イエス・キリストの福音によって永遠のいのちを得た異邦人であるからです。

² 私は啓示によって上ったのです。そして、私が今走っていること、また今まで走ってきたことが無駄にならないように、異邦人の間で私が伝えている福音を人々に示しました。おもだった人たちには個人的にそうしました。

パウロは注意深く、エルサレムに行ったのも「啓示によって上った」と言っています。これは、使徒たちに自分が認められるために行ったのではないことを示すためです。主ご自身がそうしなさいと示されたということを示すことによって、エルサレムの使徒たちから認められたのではないということを示します。

そして、自分のしていることを、走っていることに喩えています。パウロは、他の手紙でも、信仰

によって神を追い求める生活を走っているとして表現していました(ピリピ 3:13-14 等)。そこで心配なのが、「無駄」になることでした。これまでの労苦が無きものにされることを、彼は心配していたのです。無駄になるとは、福音のことばによる実が結ばれないで、終わってしまうことです。いろいろなところで、そうした心配を彼は口にしています。コリントに対しては、「Ⅱコリ 6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みは無駄に受けないようにしてください。」と言ったし、テサロニケの人たちについては、「Ⅰテサ 3:5 誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。」これが、パウロの牧会的な心です。

そして、異邦人の間に宣べ伝えている福音を、「人々に示しました。おもだった人たちには個人的にそうしました。」と言っています。この働きは大切です。それは、パウロは、イエス様の父なる神に対する祈りがありました。それは、ご自身が父と一つであるように、彼らも一つになるためだということです(ヨハ 17:23)。私たちは、一つのキリストの体に召されています。指導者の間でこのことを確認することによって、その公の信仰の宣言が意味を持ちます。

³しかし、私と一緒にいたテスでさえ、ギリシア人であったのに、割礼を強いられませんでした。

パウロたちが、エルサレムに行って、ペテロやヨハネ、ヤコブらに会いました。もし、これらユダヤ主義者の言っていることが正しければ、テスは割礼を強いられたはずですが、しかし、彼らはそれを行いませんでした。偽教師たちが権威として掲げていた彼ら自身が、パウロの宣べ伝えている福音に同意していたのです。

割礼は、自分が契約の民になるための印です。主が、アブラハムに対して、自分の子種が神の契約に入るということで命じられました。そしてモーセの律法で、八日目の赤ん坊に割礼を施すことが定められました。この割礼を受けて、ユダヤ人にならなければ神の国に入れないというのが、彼らが教えていたことなのです。しかし、主だった人々、ペテロも、ヨハネも、主の半兄弟であるヤコブも、みながテスが、信仰によって清められ、神の子どもとなっているとみなしていました。

⁴ 忍び込んだ偽兄弟たちがいたのに、強いられるということはありませんでした。彼らは私たちが奴隷にしようとして、キリスト・イエスにあって私たちが持っている自由を狙って、忍び込んでいたのです。

ここが問題です。偽兄弟と言っていますから、本物の兄弟ではないのです。救われているように見えても、実は救われていないのです。そして、彼らが「忍び込んでいた」とうことです。自分たちが偽兄弟です、なんていうことを、もちろん言う訳がありません。彼らの多くが良かれと思ってやっています。人間的には良いと思われている人が、偽の教えや行動を持ち込むことが多いです。見た目は良く見えます。イエス様が何度となく、パリサイ人たちに白く塗った墓と言われましたが、良

く思えるのです。そこで、なぜ、パウロがそこまで頑なになっているのか、分からないのです。むしろ、パウロがそんなにヒステリックになってはいけないと思ってしまうのです。しかし、気づいていないと、いつの間にか引き込まれてしまいます。引き込まれていることにさえ気づきません。

そして、彼らがしようとしていることは、「彼らは私たちを奴隷にしようとして、キリスト・イエスにあって私たちが持っている自由を狙って」いるとしています。ローマ社会ですから、奴隷というのは身近な存在で、自由人になることも身近な話題です。ですから、霊的にも同じようなことが起こっていることをこうやって示しています。具体的には、これは割礼を受けて、律法にある各種の戒めに従うことを意味していました。4章9節で、ガラテヤの信者がすでに奴隷にされていることが分かります。安息日や新月の祭り、例年行なう祭りを守っていました。再び、これらを行なうこと自体に何ら問題はありません。これらのことをしなければ神の国に入れないと言え、それは強制であり、偽の教えになるのです。私たちの身の周りにも、あたかも、これこれをしなければ御国に入れないうような、踏み絵のようにしてあることを強調する動きや教えがあります。危険ですね。

⁵ 私たちは、一時も彼らに譲歩したり屈服したりすることはありませんでした。それは、福音の真理があなたがたのもとで保たれるためでした。

ここが大事ですね、「一時も譲歩し」ないこと、それから「保たれる」ということです。キリスト者の持つ自由、つまり、イエス・キリストにあって神が行ってくださったことによるのみ、その十字架と復活の御業によるのみ救いがあるという自由です。これは神からの恵みであり、神からの賜物です。そして、恵みであり、賜物であるこの自由は、きちんとそれを守っていく、純粋に保っていくからこそ、地面に掘られた井戸のように、水が出てきます。したがって、パウロはこの真理を保っていく、純粋なままにしていくために、絶え間ない努力をしていました。彼は人々から反対を受けました。誹りも受けました。そして、物理的な迫害も受けました。なぜここまで憎まれなければいけなかったのか、分かりませんが、それでも彼は神の恵みだけの福音、信仰によるだけの救いを頑固に曲げませんでした。だからこそ、私たちは今、その恩恵に預かっているのです。

2B 交わりの右手 6-10

そして、このように神の恵みによって、信仰によってのみ救われるとする福音は、パウロだけでなく、ユダヤ人に宣教していたペテロたちも共有していたものなのです。

⁶ そして、おもだった人たちからは—彼らがどれほどの者であっても、私にとって問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません—そのおもだった人たちは、私に対して何もつけ加えはしませんでした。

パウロは、主だった人たちとは言いましたが、主の前ではそのような人はいないと付け加えてい

ます。パウロはもちろん、これらの使徒たちを尊敬しています。彼らは復活の主を見て、その前に三年以上、主イエス様と共に歩んできた人々であり、今は主を愛し、エルサレムの教会の監督であり、主に仕えている尊い兄弟たちです。彼らを尊敬していないはずがありません。しかし、それは主イエス・キリストにあって、全ての人が神の前に等しく罪人であり、ただ信仰によってのみ義と認められるという福音の真理を変えるものではないのです。11 節以降に出てきますが、ペテロがむしろ福音の真理に違反するような行動を取ったので、パウロが彼の面前で責める所が出てきます。ペテロが上で、パウロが下ということではないのです。

そして、彼らが「私に対して何もつけ加えはしませんでした。」と言っています。彼らの周りには、律法を守っている人々が多いはずですが、パウロが仕えている異邦人の人たちが、まるで律法を度外視して生きていても、それでもペテロは次のことを知っていました。救いは、ただ信仰によってのみしか来ないことを。エルサレムで、これらのユダヤ主義者とパウロたちが激しい議論になった時に、ペテロが立ちあがってこう言いました。「使徒 15:8-11 そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。9 私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。10 そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。11 私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」

私たちは、自分とは異なる背景を持っている人々をどれだけ受け入れているでしょうか？教会に入れば、何かその人が福音以外のことで、何か変わらなければ救われれないという空気を作ってしまうてはいないでしょうか？ただ信仰によってのみ、救われるのです。まるで自分が大事にしていることをやっていない人でも、主を信じているという理由だけで受け入れていますか？

⁷ それどころか、ペテロが割礼を受けている者への福音を委ねられているように、私は割礼を受けていない者への福音を委ねられていることを理解してくれました。⁸ ペテロに働きかけて、割礼を受けている者への使徒とされた方が、私にも働きかけて、異邦人への使徒としてくださったからでした。

表面的なところしか見ていない人々は、ペテロやヨハネ、またヤコブと、パウロが別々の福音を伝えていると思っていたことでしょう。しかし、それは福音が異なっているのではなく召しが異なっただけです。ペテロは、ユダヤ人に福音を伝えるための使徒、パウロは異邦人に福音を伝えるための使徒です。もちろん、どちらもユダヤ人にも異邦人にも伝えています。ペテロは、コルネリウスに福音を伝えました。パウロは、ユダヤ教の会堂に入ってそこで伝道するところから始めました。しかし、強調点が異なつたのです。

⁹ そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。

すばらしいですね、召しが異なることを認めて、それでもって自分たちは一つにされていることを、右手の握手によって交わりのしるしとしました。交わりのあるところに、キリストの平和があります。

¹⁰ ただ、私たちが貧しい人たちのことを心に留めるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めてきました。

旧約時代にも、新約の教会にも、貧しい人を顧みることについては命令を私たちは受けています。パウロたちに、ペテロたちが忘れることのないように、と言っていますが、パウロたちは確かに大いにやってきたことでした。実に、エルサレムの人たちは、恒常的に財政的に苦しい状態にありました。世界的な大飢饉があった時に、アンティオキアの教会にいた弟子たちは、救援の物をユダヤの教会にいる兄弟たちに送りました(使徒 11:29-30)。そして、パウロはマケドニアやアカイアの教会に対して、献金をしてほしいとお願いし、彼がエルサレムに戻る時に貧しい兄弟たちにその支援金を渡しています(ローマ 15:26-27)。

2A アンティオキアで歪められた福音 11-21

このようにして、パウロの宣べ伝える福音が、それら偽教師らが出てきたユダヤの地域では、受け入れられていました。異邦人もそのまま、主を信じる信仰によってのみ義とみなされることを受け入れていました。けれども、初めに申し上げましたように、ペテロは、いつもはユダヤ人たちの間だけでにいました。異邦人と共に暮らし、食事をするのは、まずなかったのです。彼が、アンティオキアの教会を訪問したことがあります。そして、パウロと同じように啓示されていた、恵みの福音を、異邦人との食事で実践していました。ところが、問題が起こりました。割礼派と呼ばれる人々が、アンティオキアに来た時に、異邦人との食事の席から離れてしまったのです。言うは易し、行うは難し、で、実際の現場にいと、恵みの福音に立つことがどれだけ難しいかを知らされます。先ほど、主だった人はいない、神は分け隔てしないとパウロは言いましたが、愛する兄弟だからこそ、パウロは人々の前で、彼が真っ直ぐに福音に歩んでいないことを指摘するのです。

1B 偽りの行動 11-14

¹¹ ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

ケファは、ペテロのヘブル語の名前です。ペテロは、主によって立てられた使徒であり、福音宣教者です。しかし、神の器だからと言って、無欠ではありませんでした。彼は実に、異邦人にも信

仰によって神が救いを与えられることについて啓示を受けた時、それはヤッファのシモンの家で、天からの幻を見たことでした。彼は、食べなさいと神に命じられた、風呂敷に入っている動物は、律法によって汚れているものであるから、自分はユダヤ人として決して食べることはできません、と言いました。しかし主は、「使 10:15 神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」と言われました。そんなことが三度あったのです。ですから、ペテロも、異邦人への神の救いについて、過ちを犯しながら悟っていったのでした。

そして「面と向かって抗議しました」とあります。パウロについては、偽教師たちは必ず彼の背後でパウロを貶めていました。言い換えると、パウロの面前では口を閉ざしました。しかしパウロは違います。真理に関することであれば、そこには確信があります。公にしなければいけません。また、ペテロへの真実な兄弟愛があります。「箴 27:5 あからさまに責めるのは、ひそかに愛するより良い。」真実を語る事ができるほど、愛しているのです。

¹² ケファは、ある人たちがヤコブのところから来る前は、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人たちが来ると、割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行ったからです。¹³ そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり、バルナバまで、その偽りの行動に引き込まれてしまいました。

食事というのは、当時とても重要な意味を持っていました。とても親密な交わりを意味していました。ですからイエス様は、パリサイ人から、「取税人や罪人と食事をしている」と責められたのです。一つのパン、一つの食べ物を分け合うことによって、同じものを互いの体に入ることによって、神秘的に一つになることを意味していました。ですから、異邦人の兄弟たちと食事をするのは、彼らとキリストにあって一つであることを示していたのです。

また、異邦人と食事をするということは、そこに食物規定によれば汚れたものとされている物を食べることにもなります。豚、ひれや鱗の付いていない魚介類など、主がイスラエルの民に汚れていると教えられたものを避けることによって、自分たちが聖なる民であることを示すように教えられていました。しかし今や、キリストが血を流されたことによって、良心から清めを行なってください、その掟もキリストが完成させてくださいました。ですから、ユダヤ人に対してはその習慣を尊重してユダヤ人のように食物規定を守って交わりますが、異邦人に対しては、そのような習慣を強要するようなことがないように、異邦人のようにならないといけません。

しかし、「割礼派」と呼ばれる人々が、ユダヤからアンティオキアにやって来ました。割礼を受けて、モーセの律法を守らなければ神の民となることはできない、すなわち救いは得られないと教えていた者たちです。イエスへの信仰を否定しているわけではありません。イエス様を信じるだけでなく、その他のことをすることによって神に義と認められると教えていたのです。

そしてパウロは彼らのことを、「ヤコブのところから」と言っています。ここでも再び、ヤコブが最終権威ではなく、神ご自身の啓示が最終権威であることを表しています。ヤコブ自身は、エルサレムの教会において、公にパウロの宣べ伝えている福音が正しく、神から来たものであることを認めました。そして、エルサレムからアンティオキアに言って別のことを教えた者たちについて、こう言っています。「使徒 15:24 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。」ヤコブ自身が、これらの者たちに困っていたのです。

ヤコブは、パウロがエルサレムに訪れた時に、「使 21:20 兄弟よ。ご覧のとおり、ユダヤ人の中で信仰に入っている人が何万となくいますが、みな律法に熱心な人たちです。」ヤコブは、イエスを信じる信仰によってのみ義と認められるという真理を信じていましたが、律法をまだ守らないといけないうる良心の弱い兄弟たちのいることを気づかって、それでパウロもエルサレムにいる時はしきたりを守り行なうように勧めました。それは救われるためではなく、ユダヤ人につまずきを与えないためでした。しかし、そのような熱心さの中に、こうした偽兄弟たちが紛れ込んでいたのであり、それが教会の中にも入り込んでいたということが実情だったのです。

そして、ペテロが陥った過ちは、「いつの間にかの行動」でありました。まず、「恐れ」がありました。箴言には、「29:25 人を恐れると罨にかかる。しかし、【主】に信頼する者は高い所にかくまわれる。」とあります。そして、「異邦人から身を引き」と言っています。一気に身を引いたのではなく、だんだんと引いていきました。波風を立てないようにしたのです。もしペテロに、「あなたは、信仰によってのみ救われると信じていますよね。」と尋ねたら、もちろんです、と答えることでしょう。しかし、行ないがそれを否定していたのです。本心ではないですが、恐れたことによって、偽りのない信仰から来る愛を実践しなかったのです(1テモテ 1:5)。

割礼派の人たちが何かを主張したのではなく、このようにして恐れて、事実上、偽りの行動をとりました。これを現代風に言うならば、まさに「忤度」です。相手本人は何も言っていないのに、相手を気づかって、本心ではない行動を取るからです。これもまた、偽りの福音を語るのと同じぐらい、誤ったことなのだということを知る必要があります。

その結果、異邦人から「離れて行った」過ちを犯しています。これでは、異邦人にとってユダヤ教に改宗しなければ、私たちの仲間にはなれませんよ、神の契約の民になることはできず、神の国に入れませんが、と言っているようなものです。異邦人に、信仰以外の律法の行ないを強要することとなったのです。こうやって、異邦人とユダヤ人にあるキリストにある一体、交わりをちぎってしまいました。

¹⁴ 彼らが福音の真理に向かってまっすぐに歩んでいないのを見て、私は皆の面前でケファにこう

言いました。「あなた自身、ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではなく異邦人のように生活しているのならば、どうして異邦人に、ユダヤ人のように生活することを強いるのですか。」

ペテロ自身が言っていました。エルサレムの会議において、「使徒 15:10 そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。」と言いました。自分たちも先祖たちも、律法の要求を満たすことはできませんでした。それゆえ神の恵みによる、信仰によってのみの救いを信じたのですが、異邦人にそれを負わせようとしていると指摘しましたが、今度は自分自身がパウロに指摘されています。

律法主義の特徴は、ここで二つのことが言えます。一つは、「偽善」です。人によく見せる、外見だけを守るという過ちです。もう一つは、「自分自身が守り行なっていないのに、相手に強要する」ことがあります。キリスト・イエス以外に、何かこれを行なわなければいけないとする時、キリストを信じるそこから流れる神の愛は本物ですから、その命令をそのまま守り行なえますが、そうではないですから、自分自身は行なえていません。それでも、そのことには気づいておらず、他の者たちに行わせようとしています。

2B 律法に対する死 15-21

¹⁵ 私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、「異邦人のような罪人」ではありません。

ここでパウロが言っているのは、外見における「罪人」のことです。イエス様が、パリサイ人たちから、「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。(ルカ 5:30)」と言われましたが、それは神の律法について、守ろうと思っているけれども守れないというよりも、全く度外視した生活を送っていて、ユダヤ人たちもあきらめて、彼らを自分たちの仲間だともみなしていないような範疇の人々のことを言っています。ここでパリサイ人たちはユダヤ人の中の罪人の話をしていますが、ここではさらに侮蔑的な言葉として「罪人」が使われています。かつて旧約聖書では、「無割礼の者ども」という言葉を使って、ペリシテ人に対して戦いましたが、それと似ています。犬どもというような意味合いです。つまり、神を度外視して、全く不道德で、異教的な生活をしている人々のことを指しています。ユダヤ人として生まれてきた者たちの多くは、神の律法がありますから、そのような不品行や汚れ、不義から守られて生きてきたのであり、私たちはそのような者たちではないと言っているのです。

¹⁶ しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによって義と認められないからです。

生まれつきユダヤ人として生きてきて、それで外見では律法の行ないよって生きてきたからといって、それで神に義と認められるのではないということを知っていたからこそ、ペテロは主イエスを自分の救い主、キリストとして信じたはずで、彼はイエス様に出会った時、「ルカ 5:8 主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」と言いました。イエス様を見て、自分の高ぶりや誇りを示されました。それで、この方に付いていったのです。イエスを信じる信仰よって、たとえ彼に欠けがあっても、それでもイエス様は見捨てず、彼を受け入れ、そして神の国に入れるようにしてください、義と認めてくださったのです。ユダヤ人も異邦人と同じように、信仰よって義と認められました。パウロも、迫害者であったのに、イエスが現れて下さり、義と認められました。二人がこのようにして義と認められたのは、後に続く他の人々も、キリストを信じることよって義と認められるためだったのです。

そして、「肉なる者はだれも、律法を行うことよっては義と認められない」と言っています。ここが、大きな問題です。肉のうちにあるので、もう既に神に反抗しています。その性質が、神に従わせないようにしているのです。午前礼拝で話しましたように、肉は、自分の力で、自分の内で何とかしよう、救おうとするのですが、そこに律法が利用されます。これこれをしなさい、と命じられていますから、それを行えばうまくいく、救われると思うのです。けれども、肉なる者なので、初めから神の義に到達することはできないのです。

¹⁷ しかし、もし、私たちがキリストにあつて義と認められようとするので、私たち自身「罪人」であることになるのなら、キリストは罪に仕える者なのですか。決してそんなことはありません。

これは、パウロが恵みの福音を語る中で、しばしば受けていた非難です。信仰よって義と認められるのであり、罪人が救われるということであれば、人はそのまま罪のままに生きようとするではないか？キリストは、人々が罪を犯すようになるために、仕えておられるのか？ということです。つまり、律法を手放したら、自分たちのやりたい放題になるではないか？ということです。もちろん、「決してそんなことはありません。」ということです。けれども、実際に、自分たちのやりたい放題やっていいのだと歪曲していた者たちがいました。ペテロが第二の手紙で、このことを話しています。「3:16 その手紙でパウロは、ほかのすべての手紙でもしているように、このことよって語っています。その中には理解しにくいところがあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所と同様、それらを曲解して、自分自身に滅びを招きます。」

パウロがこれから話しますが、律法によらない、信仰よって生きることは、御霊よって新しく生まれたところの、新たな歩みをするを意味します。律法から離れるどころか、むしろ肉の弱さのために、律法よってできなくなっていたところを、御霊よって行うことができるようになるのです。律法よっては、肉なる人は心が変わっていません。しかし、キリストの愛よって変えられた者たちは、動機が変わりました。神を愛しているから、命令を行うのです。ですから、律法であれ

ば、それに違反しないようにぎりぎりのところを歩んでいくようなことをします。法律の抜け穴を探すようなことをするのです。けれども、信仰によっては、御霊によって、素直に神の命令に従おうとするのです。律法よりもっと高い基準になるのです。

¹⁸ もし自分が打ち壊したものを再び建てるなら、私は自分が違反者であると証明することになるのです。

「自分が打ち壊したものを再び建てる」とは、律法の行ないによって義と認められることであります。これについては、打ち壊しました。しかし、ユダヤ主義の問題は、それを「再び建てる」ことであります。再び、義と認められるために律法の行ないをしようとする試みです。

¹⁹ しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。²⁰ もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

午前礼拝でじっくりと説明しましたので、ぜひ聞いてください。律法による神とのつながりには、死にました。おさらばしました。律法によれば、自分の罪が明らかになり、死ぬべき人間であることが明らかにされます。律法ではなく、自分を愛し、自分のためにご自身をお与えられた御子を信じるという、関係の中に入ったのです。キリストの愛に根ざした関係によって、支えられることとなります。そこで大事なものは、自分は何で生きているか？であります。もはや、自分は生きていない、死んでいる。その古い人は、キリストと共に十字架につけられている。自分ではなく、よみがえられたキリストが私の内に生きておられるのだ、ということです。このことによって生きています。

²¹ 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

「神の恵み」とは、このような死に値する者にこよなく慈しんでくださり、愛してくださり、それで祝福までしてくださり、栄光の姿に変えてくださるという神の好意であります。これだけのご好意を、私たちはそのまま受け入れているでしょうか。この無代価の贈り物を、対価をつけて返してしまおうとしないでしょうか？それをすると、義が律法によって得られると思ってしまうことにつながります。しかし、無条件の愛に対し、素直に受け入れて、喜び、感謝するのです。それをしないと、この恵み、神のご好意を無にすることになります。

そして、「キリストの死は無意味」と言っていますね。イエス様がゲッセマネの園で、「できますならば、その杯をわたしから取りのけてください。」と祈られました。何をもちてできますならば、な

のでしょうか？もし、その他の方法で、人々が何らかの律法の行ないによって救われるのであれば、神の怒りの杯を取り除けてくださいと願われたのです。しかし、救われないと分かっているから、「あなたの願うようにしてください」とイエス様は祈られて、それで十字架の道を歩まれました。あのむごたらしい十字架、ご自分の子を死に定めるというとんでもないことをしたことが、私たちが律法の行ないをして義と認められようとしたところで、無駄にされてしまうのです。

以上ですが、パウロがこのようにして、律法に戻ってはならないという主張を行ないました。そして次回から、ガラテヤ人に対して律法に戻って行った彼らに対して、「愚かなガラテヤ人よ。だれがあなたを迷わせたのか。」という驚きから言い始めます。これまでは、パウロの個人的な証しの部分でしたが、次からは、教えそのもの、その中身に入ります。